

---

# ラブ・ラブ・ラブ！

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブ・ラブ・ラブ！

### 【Zコード】

Z6588H

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

好きになつたらすぐに告白する。そんなあたしが放課後に告白しようとした日高くんは、人の顔を見るなり「告白するなら断る」と言って帰ろうとする。あたしはあわてて、その背中を追いかけた……。

「告白するなら断るからな」

あたしの顔を見るなりそう言ひ放つて、田高くんはぐるりと背を向けた。

自転車置き場から自分の自転車を出して、彼はそのまま帰らうとする。果然とするあたしに視線もくれず、ケータイを見る余裕までみせて、今まさにうら若い乙女をふつたなんて思えないぐらい堂々としていた。

「な……」

かあつと、自分の顔が熱くなるのがわかる。告白する前に玉砕するなんてまつたく考えていなかつたことで、恥ずかしいやら悲しいやらで頭の中がいっぱいになつてしまつた。

「ちょっと、待つてよ！」

彼が自転車に乗つたら最後、あたしの一大決心はぶつかる前に碎けて散つてしまつ。それだけは避けたくて、あたしは田高くんのお尻に思いっきり蹴りをいれていた。

背後を襲つといつ卑怯な手に、田高くんは「いってえ！」と悲鳴をあげる。自転車もろともすつゝりんごしまえと思つたのだけど、悔しくも彼はハンドルを離すことさえしなかつた。

「人の話は最後まで聞いてよ…」

田高くん、話があるの。放課後の自転車置き場でそう女子が話しかけてきたら、普通男子はだまつて聞くものだらうに。なのに彼ときたら、あたしの話なんて聞かずに返したのがあの言葉だ。

「誰も告白しようなんて思つてないわよ…」

耳まで真っ赤になつたあたしの虚勢なんて、見抜かれてるに決まつてゐる。田高くんはお尻をさすりながら、薄い唇の端を上げてニヒルな笑みを浮かべた。

「違つた？」

「違うもん！ うぬぼれないでよー。」

叫ぶ声が甲高くなる。きーきーうるさい小猿でも見るかのような目であたしを見下ろし、田高くんは「わう」「わう」と謝りもしなかつた。

「じゃあ、なにさ？」

「それは……」

とつやに言葉が出てこない。顔の火照りが強くなつて、あたしの耳からは煙が出ていのではないかと思うぐらいだつた。

「用がないなら帰るけど」

「そんな、ひどいー！」

自転車を押してすたすたと歩き始めた田高くんを、あたしはあわてて追いかける。青々と茂つた校庭の桜の木が、風にふかれてあたしたちに緑の雨を降らせていた。

「だつてお前、帰る道俺と違うじやん」

田高くんもまだ、自転車に乗つて逃げるほど白状ではないらしい。こちらを振り向き、あたしが追いかけてくるのを見て苦笑していた。あたしは田高くんの、いづこいつところが好きだつた。

結局田高くんは、あたしがずつとついてきても何も言わなかつた。何も言わないといふか、あたしがいることを気にしていないといふ感じ。違いすぎる歩幅を懸命に合わせて隣に並んでも、空気のようく流されて、気まずさを通り越していくそすがすがしい。田高昌樹。彼はあたしが高校生になってはじめて、告白しようとした決意したクラスメイトだつた。

席も近くでよく話をして、お互にのメアドだつて知つてゐる仲で。

漫画やじロの貸し借りだつてして、今日だつてあたしが貸した少女  
漫画に「面白かった」って感想までつけて返してくれたのに。まさ  
か告白しようとしてあつたのはうなづけられようとは思わなかつた。

行く道を見据えたままの田高くんの田に、あたしの姿が入る」とはめつたにない。たしかにあたしの背は小さいけれど、短くてくるくるのクセ毛頭が仔犬っぽいと可愛がられて今までやつてきた。視界の端でちょこちょこ動いていたら、すこしづり見てくれたつていいのに。

「国崎や、中学のときも皆田したやつのこと、覚えてるか?」ふいに話しかけられて、ほんやりと見上げていた田高くんがこっちを見た。その涼しげなまなざしどばつちりあつて、あたしの小さな胸が見事に打ち抜かれる。

どきん、と心が鳴る。

「中学のときつていつと……高野くん?」

「違う」

「じゃあ、市川くん?」

「違う」

「松下くんのこと言つてる? それとも遠藤くん? まさか大滝先生じゃないよね?」

「……どれも違う」

はあ、とため息をついて、田高くんは田をそらした。横顔だとより際立つすっとした鼻筋が、ぺたんこのあたしとは大違いだった。

「ミヤモトってやつに告つたことないか?」

「あるけど……?」

ふたつ上だつた富元先輩のことか、それとも同級生の富本くんのことか。あたしが訊く前に、田高くんが「同じ年のほう」とつけくわえた。

「あれ? 俺のいとこなんだ」

「やうなの? あんま似てないんだね」

中一の秋に告白した富本くん。仔リストみたいに大きな瞳といい、

あたしが告白したときには『「めんね』と優しく断つてくれたこと  
といい、田高くんとはとても似ていなかつた。

へえーとのんきに感心するあたしに、彼はぱりぱりと頭をかきむ  
しる。そして再びこっちを向いたその眉間に、かすかにしわが寄  
つていた。

「俺さ、そのいとこから話聞いてんだよ。国崎が中学のとき、片  
端から男に告白してたつて」

「片つ端じやないもん、そんな見境いないみたいに言わないでよ」

「お前はそう思つても、まわりではそう言われてるんだ。すこし  
自覚しろよ」

やけに説教くさい口調で、田高くんが言つ。あいかわらず歩くの  
が早くて、自転車もからからと軽快に音を鳴らしながら引かれてい  
た。

「前の中学じや、かなり有名だつたんだる？」国崎七恵はミーハー  
で男好きだつて聞いた。話をした男子には三日以内に告白するつて

「まあ……あながち嘘じやないけど」

ミーハーで男好きは多少脚色されてはいるけれど、たしかにあた  
しは惚れっぽかつた。

同級生から学校の先生まで、好きになつたら自分から言つた。小  
中で告白した回数は、両手に足の指をいれても足りそうにない。

先生にはもちろんフラれたけど、OKをもらつて男子と付き合つ  
たことだつてある。あたしの低い背や子供っぽさが、小動物的で男  
子受けがいいようだつた。

「付き合つても、もつて一ヶ月だつて」

「……まあ、長続きはしないけど」

続いて、せいぜい一ヶ月。朝に下駄箱の前で告白して、放課後に  
校門の前で別れたことが何度もある。

「たしかにここは高校は国崎のいた中学とは離れてるけど、噂が広  
がるのは早いんだ。俺がいとこから聞いた話は別に誰にも言つてな  
いけど、似たような話、みんな知つてる」

言つて、田高くんがちらりとあたしを見る。目があつてすかさず微笑んでみたけれど、彼は笑うどころか眉間のしわをさらに深くした。

「すこし危機感もてよ」

「なんで？」

「なんでもつて……」

はあ、とまたため息。けれど信号が赤に変わると、気づかずにはもうとしたあたしの首根っこをつかんでちゃんと教えてくれた。「男好きだつて有名になつて、嫌じやないのか？」

「まあ、嬉しくはないけど」

「そもそも否定しないのかよ」

「だつて、本当のこともあるんだもん」

噂が広がるのが、思つていたより早かつたけれど。

「別に、それはただの噂であつて事実じやないでしょ。信じるも信じないもその人の自由だし、ひとつちがくよくよしてたらよけい本当っぽくなるじやん」

「……そうくるか」

田高くんが肩を落とした。

「あのさ、国崎」

「なあに？」

「国崎がその噂についてどう思つつかはまわないけど、その噂を聞いた人がどう思うか、もう少し考えたほうがいいぞ」

神妙にひそめられた声が風に流れるので、あたしはちやんと聞き取ろうと耳を近づける。すると田高へこせよとして離れた……これじゃ小声での会話は無理だ。

「男つてのは、恋愛感情がなくても平氣で動けるもんなんだよ。ただでさえ盛りのついた高校生が、男遊びしてゐるつて噂の女子を知つたら、それを信じて身体田高で寄つてくる。そういう田にあって傷つくのは、他でもない国崎自身なんだぞ？」

信号が変わつて、田高くんは再び歩き始める。先ほどと違つて、その歩調は心なしかあたしに合わせてくれているようだつた。

「もし国崎がそれでもいひつて言つなら、俺は引き下がるしかないけど。でも、俺はそういうの、見たくないから」

ちらりと、ようやく田高くんの視線が戻る。それはいつもと違つてすこし弱々しくて、あたしの出方をつかがつてゐるにも思えた。

「……なんか言え」

「言えつてそんな、命令的な」

たしかにあたしは口を出さなかつたけど、別に田高くんの言つていることに腹が立つたわけじゃない。むしろ彼があたしのことを気にかけているということに気づいて、いつもうつとおしがられていふと思つていたぶんよけいに、驚きが強かつた。

「あん、と心が鳴る。

「やつぱつあたし、田高へこのこと……」

「言つな」

ぱかんと頭を叩かれて、あたしは舌を歯みやうになる。なにするのよと抗議しようとしたら、「なに考えてんだばか」と怒られた。「人が真剣に話してんのに、どうしてそういう流れにもつてこうとするんだよ」

「痛いいたい！ わかつたあたしが悪かったよ」めんー！

耳をぐいぐい引っ張られて、あたしは悲鳴をあげてあやまる。周囲の視線が集まる前に、田高くんはあっさりとあたしを解放した。

「……ありがと、田高くん」

痛みの残る耳をむずむずすると、まだ少しは田高くんの手の感触と、指先のあたたかさが残っている。それを感じながら、あたしはぽぞりと呟いた。

ちょっとばつが悪い。でも、言つてくれた田高くんだったでこころいろ覚悟があつたに違いない。あたしがもう一度ありがとうと言つても、彼は「別に」とぶつきらぼつだつた。

「それでね、田高くん。あたしやつぱり あつー。」

あたしがなにを言おうとしたか察したのか、田高くんは颯爽と自転車に飛び乗り、力強くペダルをこいだ。

「ちょっと、待つてよー。」

あわてて、あたしも後を追つ。自転車の速さにまとうてこ追いつけないと思つたけど、去つてゆく背中はまごど小さくならなかつた。決して全力でこげただそつとしない田高くんに、やつぱり、あたしの心はどうとも鳴つた。

「俺、国崎の『好き』ってのがよくわからないんだよな……」  
車どおりの多い国道から、川沿いの砂利道に入つたところで、田高くんが言った。

結局さほど自転車には乗らず、またからからと押して歩いている。そもそも当たり前のようにあたしのカバンをかごに入れてくれて、ぼんやりと河川敷で遊ぶ子供たちを眺めていた。

「今まで告つた相手は、どうこうといふのが好きだったんだ?」「どうこうといふの……?」

その質問に、あたしは答えられなかつた。

「考えたことなかつた。好きって思つたら、もう好きになつてたか

「ら

「どういつきつかけ？」

「重い荷物持つてくれたとか、黒板で届かないところ消してくれた  
りとか、かな？あと、体育で走ってるの見たり……普通に話して  
た時とか。うつかり手がぶつかったとか、目があつたとか？」

指折り数えるあたしを、日高くんがしげしげと見つめてくる。歌  
が上手だった、眼鏡姿がかっこよかつた、頭をなでてくれたと続け  
たところで、「それぐらいでいい」とさえぎられた。

「そういうのが積み重なつて好きになるのか？」

「違うよ。それで好きになるの」

「じゃあそれがきつかけで、どんどん好きになると？」

「？好きだから、好きって言つんだけど」

しばらく、沈黙が流れた。

日高くんはあたしを見つめたまま、前も確認せずに歩き続ける。  
大きな石にハンドルをとられてよろけたけど、それでも視線は決し  
て離れなかつた。

「……つまり、国崎は、好きだと思つたらすぐにはいつのが」「うん、だいたい」

好きになると、胸のあたりがぱっと熱くなる。どきん、と心が鳴れば、あたしはその人のことを好きになつていた。

「お前のそれは……違う『好き』じゃないのか？」

「好きは好きじゃないの？」

「いや、だから……」

なんと言おうか考えて、日高くんはようやく皿をそらした。あまりに長いこと見つめられていたので、あたしはすこしそまつとする。また顔が赤くなりかけていた。

「国崎の好きは、俺が保健の先生がしゃがんだときに、タイトスカートがピチピチになるのを見たときと一緒に思つ」

「なつ……あたしそんな変態じゃない！」

「違うって、俺はそういうことを言つてるんじゃないで！」

変態と大声で言われたことに、日高くんは傷ついたようだ。顔を真つ赤にして、ぱかんといつもより強くあたしの頭を叩いた。

「じゃあ、日高くんは保健の先生のことが好きなの？」

「違うって」

頭を振つて、日高くんはまた考える。ぶつぶつと口の中になにごとか呟いて、あたしに言つ順序を決めてくるようだつた。

「……国崎の告白は、一瞬のときめきをそのまま口にしたものなんだと思つ。どきっとしてそれを好きだと思つて突つ走るから、すぐに飽きて違うやつに惹かれるんだ」

形のいい眉をくいつと上げて、日高くんはあたしに問う。ずばり見事に、彼はあたしのいつものパターンを見抜いていた。

「そりやたしかに、好きっていう感覺は人それぞれだと思うけど……

でも俺は、国崎の好きはどうも、違うように思うんだよな」

「……じゃあ田高くんは、どんな感じで人を好きになるの？ 先生の色っぽいところ見ても好きにならないってことは、子供っぽい人のほうが好きなの？」

「いや、そういうわけでも」

また、ぽりぽりと頭をかぐ。それが田高くんのくせで、あたしは髪がこすれて流れてくる彼の香りを密かに気に入っていた。

「俺は、あまりタイプがはつきりしてないからな。いつの間にか相手のことをよく考えるようになつてて、あいつとあいつことができたならとか、こんな話ができるならとか一人で考えるよくなつてたら、もうそいつのこと好きになつてる感じ」

「それでその子に好きって言つの？」

「俺はチキンだから、そつそつ簡単に相手に好きとか言えないんだよ。本当に好きになつたやつには、言つたくてものどにつつかえて出てこないこのほつが多いんだ」

自分の恋愛を話すのは恥ずかしそうで、田高くんの頬はすこし赤らんでくる。またちらちらと「ひかに視線をやって、田が合ひつとすぐ」にそらした。

「……訊くけど」

「うん？」

「国崎、好きになつた相手と、キスとかできるのか？」

「えつ……」

返事に詰まるあたしに、田高くんはさらに続けた。

「付き合つたとしても、キスしたりセックスしたりとか、考えたか？」

「それは……でも……しなくたつて別に、好き同士ならいいんじゃないの？」

ちよつぴりお堅いイメージのあつた田高くんが、そんなこと言つとは思わなかつた。あたしのざきまきが伝わつたのか、田高くんもちよつと氣まずそつだ。

「お互い好き同士で、気持ちで満足しても、やつぱり自然とそつ

いう流れになる時だつてあるんだ。俺は国崎が、そういうことを考えただ好きって言つてゐるよつて思えるんだよな」

「それは……」

たしかにあたつていた。

あたしのファーストキスはとつぐに済ませてある。中一のときの彼はあたしの告白をあつさりとOKして、何度かデートを重ねて、相手からキスしてきた。

あたしはそのとき、何がが違うと思った。相手のことが好きじやないと思つた。だから、その後も続かず別れてしまつた。

結局いつも、キスまでだつた。手を握る前に別れてしまつことのほうが多い。相手から去られることもあつたけど、だいたいはあたしから切り出すことのほうが多いわけだ。

「たしかにさ、俺たちも年頃だから、H口いことばかり考えたりする。でも、相手はやっぱり好きな相手がいいつて思つてるやつのほうが多いと思う。その好きって言つのも、それこそ相手の色っぽいところ見たから、つていう理由ではないんだよ」

女子はどうか知らないけれど。そう付け加えて、田高くんは唇を閉ざした。

あたしは、好きと言つて、ありがとうと受け入れてもらえばそれで満足だつた。その後のことなんてほとんど考えてなかつた。玉砕覚悟。あたつて碎ける。そういう意思で向かつて行つたこと自体、あまり相手の気持ちを考えていなかつたのだと思つ。

「国崎はすこし、気持ちを抑えてみるといいと思うんだよな。高校でも中学の時みたいに誰彼かまわらず好き好きやつてたら、女子たちに困つけられてもおかしくないんだぞ？」

「……でもあたし、今回半年我慢したよ？」

意外そうに、田高くんが眉をあげた。

そう。今回のあたしは、告白するのを待つた。

田高くんのことが好きだと思つても、すぐに突進しなかつた。すこし慎重にならうと思つて、時間をあけようと努力したのだ。

田高くんが、あたしの中学時代をどこまで知つているかはわからぬ。はたして富本くんは、あたしと女子とのバトルを見て、だからこそ田高くんに国崎七恵は気をつけろと言つたんだろうか。

田高くんの指摘はもう起つていた。あたしは中学のとき、女子とひと悶着も二悶着も起こしていた。その理由は何を隠そつ、あたしの恋愛行動についてだつた。

誰かと付き合つて、一週間もしないうちに他の誰かのところに行く。誰がその男子に片思いしていたかなんて気にしなかつた。そういうことを繰り返していくうちに、女子からは冷めた目で見られるようになり、友達にですら仲間にいれてもらえなくなつた。

高校を中学の同級生たちが行かないところを選んだのだけ、新しい男を捜すためだと言っていた。

言われてみればそうかもしれない。でもあたしは、高校で変わら

うと思つてゐた。

あのころのよう、自分の思つままにするんじゃなくて。気持ちを抑えて、おやえて、おやえて、そして言おつと決めていた。

だから今回も。高校で最初に隣の席になつた日高くんに、好きだと言つのに時間を空けたのだけど。

「その半年の間に、他のやつのこと好きになつたりしなかつたか？」

「それは……」

否定しきれない自分が悔しい。

たしかにあたしは、この半年で日高くん以外の人も好きになつた。化学の先生とか、生徒会長とか、後ろの席の男子とか。でも、どうんと心が鳴ることがあつても、それが長く続くことはなかつた。

何度も心が鳴るのは日高くんだけだつた。

一見ぶっきらぼうで冷たくて、むかつときせられる」とのほうが多いけれど、ふとしたときに見せる思いやりに心を打ち抜かれてばかりだつた。

「言つのをただ我慢するだけじゃ、なにも変わらないと思つ。結局告白すれば、国崎はすぐに飽きるんじゃないのか？」

それは、自分にもわからない。なにせあたしはまだ、日高くんに自分の気持ちを伝えていいのだから。

日高くんに好きだと言つて……彼はまだ言わせてくれないけれど、言つたとして。日高くんがあたしの気持ちを受け入れてくれるかまづわからない。

もし、受け入れてもらいたら。あたしはそれで満足して、また他の男子に田移りしてしまつんだろうか？

「国崎はまず、ちゃんと好きな人を見つけたほうがいい」と思つ

それきり、日高くんは何も言わなくなつた。

あたしも何も言えず、ただ、隣を歩き続けた。

「結局、家までついてくるんだもんな」

はあ、とため息をついて、田高くんは家の前で足を止めた。

田高くんの家は高校に近い。徒歩でもじゅうぶん通える距離なのだから、自転車ならもっと早いに違いない。毎朝早起きして、朝食もそこそこ満員電車に乗り込むあたしが、まるで生活が違っていた。

「ついてきたのはいいけど、国崎、帰り道ちやんとわかつてるとか？」

「まあ……たぶん」

田高くんばかり見ていて、道順を気にしていなかったとは……言えない。恋は盲田といえど、ここまでなにも見ずに知らないところを歩いた自分に、自分で驚いてしまう。

呆れる田高くんの顔を見て、あたしは今さらながら、この猪突猛進な性格に恥ずかしさがこみ上げてきた。

「じめんね、なんか家までついてきちゃって。じゃあ、また明日ね」

end

道に迷つたら最悪、タクシーでもなんでも使えばいい。そつ思つて自転車のかごからカバンを出そつと伸ばした手を、田高くんがしつかとつかんだ。

「駅まで送る」

「いいよ、そんな。せつかく田高くん、家に帰つたのに……」

無理にカバンを取りうつとすると、強い力で押し戻される。そして田高くんは自転車にまたがつてくるつと方向転換したかと思つと、おもむろに後ろを指差した。

「乗つて。荷台ないけど、立つといふわかるだう?」

「だから、あたし歩いて帰るつてば」

「俺ん家の近くで国崎がうるついてたつて噂になつたら嫌なんだよてつきり優しさだと思ったら、違つた。あたしはむつとして、無言で自転車にまたがる。

「ちやんとつかまつてるか?」

「……うん」

肩に手を乗せると、田高くんは首が弱いのか「もつもつ」と外側にして」とくすぐつたがる。顔は見えないけどそのしぐさが可愛くて、あたしは素直に手の位置を変えた。

「じゃ、行ぐぞ。足まきこまれんなよ

「わかった」

田高くんはようめくことなく、すんなりと自転車をいじり出した。

「国崎ん家、帰るの遅くなつても大丈夫なのか?」

「うん、全然へーき」

田高くんはまた、川沿いの道を走つた。

気づけば、夕暮れになつていた。まだ空の端に暗さはないけれど、太陽は茜色に変わつてゐる。川の流れも水面の反射も、すべてが燃えるように赤く色づいてゐる。

こつもは隣か正面で話していたから、じつして田高くんの後ろ姿をまじまじと見るのは初めてだった。風になびく短い髪から、ちらりと耳がのぞいている。肩に手を乗せてみて、あらためて広い背中をしているのだと気づいた。

行きと違つて、帰りは本当に会話がない。またあたしは空気のようになつていいかと思うけど、田高くんはあたしを送るために自転車に乗つている。それがなんだか嬉しかつた。

田高くんのこうこうところが好きだつた。

「ふつきらぼうで、冷たくて、でも実は優しいところ。あたしは何度、それで心が鳴つたかわからない。」

結局今日の会話だつて、ただ単にあたしを注意していたわけじゃない。あたしのことを心配して、考えながら喋つてくれた。言葉は冷たいけど、そのふしふしに、あたしは田高くんの優しさを感じていた。

田高くんのことをいつ好きになつたのか。考えてみたらそれはよくわからない。隣の席でかつこいなとは思つたけど、それはまだ、好き、ではなかつた。

少しずつ話すようになつて、あたしはいつもどきつとしてばかりで、でもすぐには言わないようことにストップバーをかけていた。でも今、じうじて田高くんの後ろにいたら、抑えもなにもきかなくなつてしまつ。

「 言つなよ」

「ねえ、と口を開きかけたとき。田高くんが言った。

「絶対、今は言つなよ」

決してこつちは見ない。あたしは田高くんの頭ばかり見ているけど、その声は風に乗つてよく聞こえた。

「でもあたし、やつぱつ……」

「言つなつてば」

ふりむいてきつと睨み、田高くんはまた向き直る。彼がこつちを見ていないので、あたしはふつと頬を膨らませた。

断るつもりでも、せめて言わせてくれてもいいだろ？」

「……一年になつてクラスが違つても、気持ちが変わらなかつたら、  
言つていー」

「え？」

声が小さくて、よく聞こえなかつた。でも田高くんは確かに、そ  
う言つた。

あいかわらずじつちを見ない。あたしが身を乗り出して見よつと  
すると、意地になつて顔をそむける。バランスを崩しかけて自転車  
がふらついて、田高くんは舌打ちしながら元に戻した。

そんな背中に、あたしは訊いてみた。

「……どうして田高くんは、あたしにここまで言つてくれるの？」  
噂とか、まわりの反応とか、あたしの考え方とか。そんなの無視  
していいものなのに、なんで田高くんは、あたしに言つてくれるの  
だろ？

その答えを、田高くんはすぐ返さなかつた。

しばらく川の流れを眺めて、時間をやり過ごしてから、おもむろ  
に口を開いた。

「俺も、案外惚れっぽいんだよ」

田高くんはそれだけ言つて、また無言になつてしまつ。  
もくもくと自転車をこぎ続ける彼の、その見え隠れする耳が赤くなつてゐるのを、あたしは見逃さなかつた。

「田高くん、もしかして」

「言つたな」

「田高くん、あたしね」

「言つたつつのー」

急にスピードをあげられて、あたしは悲鳴をあげてその背中にじ  
がみついた。

くつつけた頬から、田高くんの体温を感じる。彼の早い鼓動と、

鳴り響くあたしの心が溶け合つて聞こえてくる。

そつと、背中に唇を寄せても、田高くんは気づかなかつた。

かつてないくらい大きな『好き』を、あたしは今、口高くんに感じていた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6588h/>

---

ラブ・ラブ・ラブ！

2010年10月8日14時59分発行